

| | |
|------------------|---|
| Title | 青年の社会的危機意識に関する若干の考察 : イスラム・テロリズム, IRA, オウム真理教 |
| Author(s) | 丸山, 久美子 |
| Citation | 聖学院大学論叢, 14(2): 167-176 |
| URL | http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=210 |
| Rights | |

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

青年の社会的危機意識に関する若干の考察

—イスラム・テロリズム, IRA, オウム真理教—

丸山久美子

Social Crisis in Modern Youth

—Islamic Terrorism, the IRA, Ohmu Shinrikyô—

Kumiko MARUYAMA

In the beginning of the 21st Century, there has been a momentous incident, the simultaneous multiple acts of terror in the USA, perpetrated by Islamic terrorists related to Osama Bin Laden, who is a leader of Islamic terrorism and militant conflict. We recognize that much terrorism is closely related to religious values such as in the case of the Irish Republican Army (IRA), Ohmu Shinrikyô and Islamic militant conflict, sometimes called Islamic Fundamentalism of Radical Islam. Religious fanaticism and various kinds of ideology have led to terrible violence. We can see the process of the formation of terrorism and can understand the sensitive inner world of consciousness of the terrorists. These problems are discussed from a psychological point of view.

はじめに

21世紀が組織犯罪の時代、テロリストの氾濫、攪拌された世界戦争の時代となる可能性があると予測したのは、はからずも1995年、ドイツにおいて日独大学生の社会的危機意識の比較研究 (Maruyama, Bibeler, 1995, 丸山, 1996) を行っていた時であった。日本で起った未曾有の地下鉄サリン事件に関与するオウム真理教教団の優秀な青年達の意識構造に関する研究が急務となった。他国にあって日本で生じた出来事を眺望する時、日本に在住するときよりも事態が客観的に見えてくる。ドイツ人はオウム真理教の起こした事件をカミカゼ・メンタリタート (神風特攻隊の精神) と呼んだ。それは彼らが無意識に起こしている行動が自爆テロに通じていたからである。日本国においては比較的寛容なオウム真理教の起こしたサリン事件は外国人の目から見れば驚くべきことであった。

2001年9月11日に勃発したウサーマ・ビン・ラーディン率いるイスラム主義武装闘争派組織「アル・カイダ」のアメリカ世界貿易センターに彼等がハイジャックした旅客機ごと突入して自爆する

Key words; Islamic Terrorism, IRA, Ohmu Shinrikyô, Social Crisis, Religious Fanaticism

青年の社会的危機意識に関する若干の考察

テロはまさしくカミカゼ・メンタリタートの最高峰とさえ言える行動であった。戦時下ではカミカゼ・メンタリタートは敵を自らの命と引換に打ち倒すことであるから、平時では考えられない勇気ある戦闘行為である。しかし、オウム真理教の起こしたサリン事件は自らの命を危険に曝して地下鉄で通勤する一般市民の命を無差別に奪うという事が、いかに驚異的な事であり最も卑劣な犯罪行為であるのかを知る必要がある。だが、時の政府は破防法を適用してはいない。オウム真理教の起こした数々の事件がテロではなく、宗教集団の起こした信仰に基づくものであると判断して未だに教祖の裁判はいつ果てるともなく存続している。外国人の目から見れば日本はテロ支援国なのかと映る。これに対する日本人の反応が余りに鈍感であることが目に余る。

現在でもオウム真理教（アレフと改称）はテロ集団のリストから削除されてはいない。これより先、日本赤軍にハイジャックされた旅客機の乗員を人質に取られて、時の日本国総理が「人の命は地球より重い」としてテロリストの要求を飲み人質を解放したとき、ドイツでは茫然自失したと言われる。日本はこの総理を絶賛して平和人道主義を永遠に行くが如き奇妙な錯覚と一國平和主義の幻想に酔いしれた。

本研究の目的は日本人青年とドイツ人、アングロ・アイリッシュ人の青年達がテロリズムや組織犯罪に対して如何なる危機意識を感じているのかを過去の調査データから推測することである。

テロリズムの系譜

テロリズムは政治的殺人である。健全な市民の中に潜む反政府的ドグマが挑む反社会的性格を有する人間の政治的組織的暴力行為である。個人的に行われる場合でも、それが政治的背景を持ち、特定の運動や思想と結びつく時はテロリズムと呼ばれる。

歴史的には古代ギリシャ・ローマ時代はテロリズムの時代とも言えるが、近代テロリズムはフランス革命時代のジャコパン派の恐怖政治（1793-94）、ロシア革命時代のソビエト政権の反革命弾圧（1918-21）、或いはそれに対する白軍のテロ（革命派のテロは赤色テロ、反革命派のそれは白色テロ）、因に革命派が政権を取ればその国家は赤一色に染まる。その他、白色テロはヒトラーのナチズム、ボル・ポト派（カンボジア）等の大量殺戮を行った国家的恐怖政治等が挙げられる。

マルクス・レーニン主義によれば、テロリズムは元来反革命的支配階級の手段であって、革命派のテロはこれに対抗するための自衛手段であり、赤、白テロのどちらを正当化しているのかを論ずるのは現実には難しいとされる。取りも直さず、テロリズムが他方のテロリズムを生み出し、報復としての戦闘を繰り返す悪循環、暴力の連鎖反応こそが重要な課題である。

日本において江戸末期から明治維新にかけての動乱期に頻繁に起こった政治的暗殺事件は赤色革命のテロリズムである。社会的には一般に民主的な政治制度が十分に確立されていない場合、又はそれを有効に運用して行く政治的社会風土に欠けている国では、言論に訴える以前に直接的な暴力

を用いる傾向が強く、革命－反革命時代における恐怖体制とは若干異なった次元でのテロリズムを発生させている。

広辞苑によれば、テロリズムとは「暴力を用いて世人を恐怖せしむる主義。恐怖革命主義」と定義している。政治学辞典では「政府又は革命集団によって組織的・集団的に行われる恐怖手段」、Encyclopedia (1934)によれば「組織された集団乃至党派が、その目的を体系的暴力行使によって実現しようとするとき、その背後にある方法又は思想」とある。これらの定義を包括すれば以下の問題点が挙げられる（長尾，1989）。

- 1) テロリズムの主体を反権力側だけとするか、権力側のテロも含めるのか。
- 2) テロリズムを単に暴力として捉えるのか、恐怖（心理的側面を強調する）と言う要素を定義の中に含めるのか。
- 3) テロリズムを「体系的」暴力、集団による組織的行為として、孤立した個人の暗殺行為、非政治的・実存的な行為を含めないのか。

上記の3点は国家論、戦争論を抜きにしては論じられず、本研究の枠を越える。ここでは、テロリストの形成過程やその本質を論ずる。日本の大正時代のアナキストを気取った青年達がクロボトキン（ロシアの地理学者・無政府主義的社会主義者，1842-1921）の著書を小脇に抱えながら、短刀を懐に忍ばせ、巷を闊歩した頃以来、日本人青年はアナキズムに埋没、ネチャーエフ（1872）の「革命家教程」の一項には－「革命家は呪われた人間である。彼は自分の利害も、私情・私事・係累・所有物も持たず、名前さえ持たない。彼のすべては、革命への関心・思考、情念に吸収される」－にしめされるように革命家は献身者であり、自己に苛酷であるから他者にも苛酷になり、あらゆる教説を軽蔑し、世論を軽蔑し、既存の社会倫理を嫌悪し、その人格の深みにおいてその言葉と行動において、彼は市民的秩序・文明世界、その法・所有・慣習・倫理と絶縁する。彼はこの世界を妥協なき敵であり、彼がこの世界に生き続けるのは、専らそれを一層効果的に破壊するためである。自らの死と、革命を妨げる一切を自らの手で破壊する覚悟を持たねばならぬ」とある。ニヒリズムと同様の思考体系、宗教的教条を意味するこのテーゼを青年たちは命を賭けて、世間のプチブル的イデオロギーと対決しようとした。彼らは、無防備な一市民に激しい不安を掻き立て、政治的目的を達成しようとする政治過程の参加者である。国家を転覆して新たな国家を構築しようとするまでには至らず、「絶望の闘争」をくり返す。死を覚悟したものは何ら国家的規範を持たず、自爆テロを行うのは単に日本のカミカゼ・メンタリタートの故ではない。誤解を恐れずに言えば、自爆テロの根源は日本赤軍派のイスラエル・ロッド空港でのテロ（1972）に始まると言われるが、自爆してその目的を遂げるのはネチャーエフのテロリスト論の本命である。

テロリストの生成要因

多くは貧困による反政府活動家が赤色革命家としてテロリストになる。しかし、テロリストを養成するための要因は単に貧困や宗教、価値観の軋轢だけではない。心理学的に言えば、裕福な家庭の青少年が精神的に不安定で、裕福な親に対する超過激な反抗、狂暴な反抗者、反社会的人格障害の持主であれば、彼らを親元から引き離し精神療法と称してテロリストに仕上げる事が出来る。それは簡単なシステムである。精神的に不安定な青少年は病院に入院しなければならないほど不健康になったのは親のせい、ひいては社会のせいにする。自分たちを不健康にしている親たちの世界を破壊しなければ自分の病気は完治しないと暗示をかけられる。この方法は共産主義革命の裏にあった理論の一つであり、その極端な延長が腐敗した資本主義体制を破壊したら、労働者が運営する清廉潔白な社会が生まれる事やそれを追求出来る明晰な頭脳と手段とを備えた中流社会の知識階級がとりこまれる。彼等の心を魅惑的な言辞で捉え、理想主義的な夢を実現させるのだと言ったスローガンを暗黙の内に抱え込ませるのである。若くして燃えるような信条を植えつけられた感受性は大人に成長してもなお普遍的に存続し続ける。一般的に言えば、彼等は反抗者、理想主義者、ピューリタン、権威主義者、偽善者、大義擁護者、テロリスト等々、既に自ら捨ててしまった裕福で秩序ある生活に馴染まない人間になってしまうのである。既に成人に成長して自我が確立してしまった人間にはこのような教育は出来ない。既に精神を病み、不安定な形で成長している発育途上の青少年にこの種の教育を実施すれば、彼らは広範囲に外界で活動を始め、世界に広がり、その波紋の中から、パレスチナの「黒い9月」、アイルランドの「IRA」、アルゼンチンの「人民革命軍」、日本の「赤軍」、「オウム真理教」等が出現するのである。

1960年代以降、学生運動の延長で派生した国際的テロリスト日本赤軍のメンバーはパレスチナ過激派と連携して華々しく活動した経緯が良く知られている。このテロ組織は中産階級の子弟から成り立ち、テロリズムが発生する最大の原因と言われる貧困とは無縁である。2000年にその首謀者の一人である重信房子が逮捕されて以来、アメリカ国務省は海外テロ組織のリストから日本赤軍を削除している。

1989年に宗教法人として認可された「オウム真理教」は化学生物兵器で武装し、テロによる国家転覆を謀った凶悪なカルト教団として、現在でもアメリカ国務省は海外テロ組織のリストから削除していない。オウム真理教の反社会的危険性を指摘されながらも日本国家は「宗教弾圧」であり、「宗教団体への破防法は馴染まない」という人権派の諸氏に煽動されて、教祖が逮捕された現在でも判決は長引き、6年後の今日でさえどのような結末になるのか不透明である。「信仰と犯罪」の違いを明確にしなければ、現代社会のテロの本質を見誤る危険性を時の政治家は自覚しなければならない。釈放された信者はオウム真理教を改名して「アレフ」と名乗り、すでに活動を開始している。

青年の社会的危機意識に関する若干の考察

アメリカ国務省がオウム真理教から目を放さない事情を日本人は既に忘れていないかに見える。オウム真理教のメンバーは知的中産階級の子弟で構成されている。彼らは教祖の神託に従順に従い、1994年、長野県松本市で毒ガス「サリン」を噴霧して多数の人を殺害し、その1年後に地下鉄サリン事件を起こした。彼らの精神構造は平和ボケしている日本社会に対する漠然とした不安、危機意識が嵩じて将来に対する希望を見出せないと言う青年たちの虚無的な感情が教祖の教理と結びつき、平然と人を殺すという凶悪なテロ行為に走った。彼らは自らの数々の殺人行為がいかなる宗教的意味があったのかを明確に知っていたのだろうか。いかにも無意識的なテロ行為のゆえに反って一般人は恐怖を覚えるのである。まさしく、彼等の行為は信仰のゆえではなく、犯罪そのものである。

2001年の9月11日、国際テロリストとして世界中に手配されているテロリストであるウサーマ・ビン・ラーディン (Bin Laden, Usama) の一般的に知られている生育歴を概観する。彼は中東サウジアラビアの南に位置するイエメン出身の富豪の家に生まれた世界的に名を知られた実業家である。世界の金融取引を巧みに行って富を受益して利益を得ている現代資本主義の人間である。現代文明の利器、ハイテクを駆使し、インターネットや高性能携帯電話を世界に散らばる彼の仲間との連絡網にする。一方、現代文明の利器に頼る事なく、人間的な対面交流をも重視し、いかにも柔和な人間に印象づけられ、会話の調子も穏やかでひ弱にさえみえる。このような温和な人間が何故世界的テロリストなのであろうか。

ビン・ラーディン一族から勘当されたが、サウジの王子と親交の篤かった彼は青年期を裕福な若者たちと同様の遊蕩三昧な生活をしていたらしい。その後16才で地元の大学で経済学を学び、「イスラム運動」にのめり込む。卒業と同時にソ連のアフガン侵攻に対する聖戦（ジハード）に参加する。エジプトの「イスラム集団」を筆頭とする各国のイスラム原理主義組織と親交を深め、アラブ人義勇兵の受入組織「奉仕者の家」に出入りしてイスラム法学者アブドラ・アザム師に出会って感銘を受け、本格的な義勇兵斡旋組織「聖戦と救済」を創設し、彼がスポンサーになった。アザム師が暗殺されると、「奉仕者の家」と「聖戦と救済」の過激派を集めて「アル・カイダ（原理・金言）」という国際テロ組織を旗揚げした。

かくして、彼の世界的テロ活動は世界中に広がり、アラブの国籍を剥奪された彼は最も世界で危険な人間となった。こうした危険なテロリストは彼の生まれ育った裕福な環境、知的教育からどうして生まれるのだろうか。しかし、彼の世界観を以て知れば世界を向こうに廻して活動するテロリストたる所以が見えてくる。彼は生粋のイスラム教徒である。国際連合という概念を彼は理解しない。彼の世界には「イスラムの世界」と「それ以外の世界」しか存在しない。彼の世界は超国家的世界である。国民、国家、国境、国家主義は存在しない世界である。彼の描く「イスラムの世界」と彼自身の超国家的イデオロギーを融合する世界の実現こそ彼の求めるただ一つの世界である。それを達成するためには闘争あるのみである。アラーの神は闘争に勝利する知性と力を与えるであろう。それが彼の祈りである。彼は武装する。武装闘争しか手段がない。イスラム主義武装闘争派の

青年の社会的危機意識に関する若干の考察

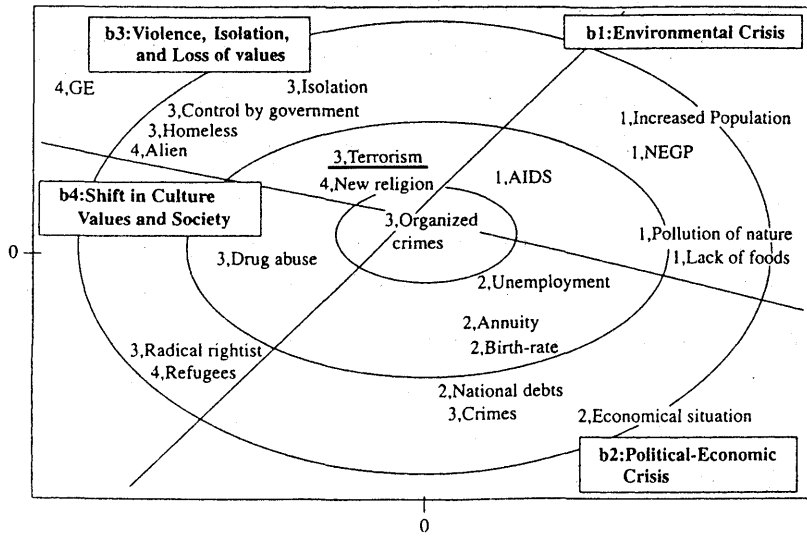
1995年、1999年のドイツ、アイルランド人学生の社会的危機や不安について調査し、それらの構造を日本人の構造と比較した結果を検討してみよう（丸山1996, 2001）。

図1 a, bはドイツ人大学生と日本人大学生の社会的危機意識の2次元空間布置, 図2 a, bはアイルランド人大学生と日本人大学生のそれを比較した2次元空間布置図である。

ドイツではその当時東西の壁が崩壊し、そこにおける経済的格差から生ずる経済的危機から失業に追い込まれた若者集団である「ネオ・ナチ」党が巷を闊歩し、日本ではオウム真理教の地下鉄サリン事件が勃発した。ネオ・ナチ（極右翼過激派）は西側ドイツの経済を支えたトルコ人を虐待するという暴挙に出て、大都市街はポリスで溢れていた。日本はオウム真理教の教祖が逮捕され、多くの幹部が警察に連行された。このように社会事情が若干異なるとしても、そこに居住する若者たちの社会不安や危機感が増幅されたのは自然である。ドイツ、日本人の危機感の構造は「組織犯罪」という共通の概念で纏まっている。ドイツ人も日本人も「組織犯罪」-この場合暴力団やマフィアは除く-が中心となって社会的不安を引き起こし、危機感を煽るというものであった。テロリズムの危機はドイツではネオ・ナチ、新興宗教と同一の領域に属し、日本では新興宗教と強く結びついてはいるがネオ・ナチ（極右翼過激派）は日本に居住する外国人や麻薬組織の領域に属していた。これが1995年度の調査の結果である。それに対して、1999年、アイルランドでは相変わらずIRA（アイルランド共和国軍）が武装放棄せず、比較的南アイルランドは平穏であったが、統一王国（UK）の一端を支える北アイルランドは険悪な状況にあった。IRAを支持するイギリス・ロンドンの大学生は大学の前でピラを撒き、大学内には人種差別者のような獐猛な風貌のポリスが行き来していた。その時、日本では東海村原子力発電所の臨界事故のために多くの人が危機感を募らせていた。このように状況はかなり異なったものではあるが日本もUKも社会的危機状況にある事は否めない。しかしドイツでの調査のように日本とアイルランドの学生たちの意識には明確な形で共通項は見つからない。日本人の社会的危機意識は原子力発電所の臨界事故に集約されたような形で様々な社会的不安項目が纏まっている。しかし、テロリズムは日本では失業や年金・社会保障の不安などの項目に近く、すでにオウム真理教のテロリズムの影響は薄れている。それに対して、図2 aに示されるようにアイルランドはテロリズムが大きな社会不安を醸し出す要因となっているかに見える。この領域は人間関係の疎遠と孤立という項目に集約されている。テロリズムを引き出す要因は北アイルランドのIRAを意識したものである。IRAは北アイルランドに居住するカトリック系の武装集団で、同じ民族でありながらキリスト教の宗派が異なるというだけでテロを繰り返す運命を持たされた国である。そこにおける、若者の期待願望が「人間関係の疎遠と孤立」の修復、及び解放につながっている。

青年の社会的危機意識に関する若干の考察

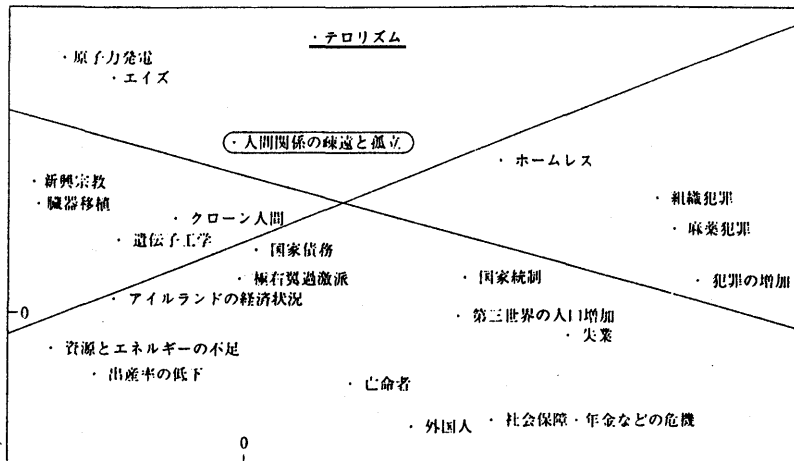
b : 日本人学生 (1995)



() 内は調査年

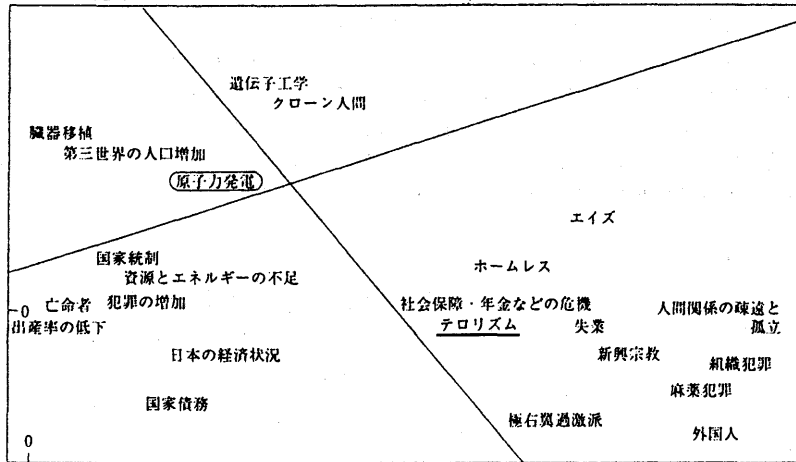
図2 社会問題に対する危機意識の空間布置図

a : アイルランド人学生 (1999)



青年の社会的危機意識に関する若干の考察

b : 日本人学生 (1999)



おわりに

現在、世界は湾岸戦争時（1991年）よりは規模が小さいとはいえ、テロリストが潜伏しているアフガニスタンに空爆を仕掛けており、世界中がテレビの前で、空爆の犠牲になった一般難民の極貧の状況に胸を痛めている。世紀の始まりが戦争で始まる繰り返しを世界中が困惑して見ている。人間の愚がこの世紀を人類の破壊に導くことがないように慎重に見つめる姿勢を崩してはいけない。いかなる平和や繁栄を誇っている瞬間でも、テロリストは人間の内なる魂の中に存在する。IRAのテロリストからプロテスタントの牧師になったブラウン師の告白は極めて異例なものであるが、彼は人と人との信頼関係に満ちた絆が内なるテロリズムを克服すると述べている。

注

- (1) キリスト教やイスラム教は共にその根幹はユダヤ教の旧約聖書に登場するアブラハムの子孫として後に誕生するイエス・キリストとムハンマドをそのまま教祖とする。イエスは弱者に対する愛から神の一人子として人間の社会に誕生し、人間の愚行を償う「犠牲の山羊」として殉教した神の子である。イエスが十字架上で殉職し、弟子達は迫害されながら地下に潜って宣教の業に励み、その勢力を伸ばして、ローマを滅亡させ、資本主義と結びつき現代西欧諸国を支配する1大宗教となって今日に至っている。それに対して、イスラム教の教祖ムハンマドは教祖として一大帝国を中東地域に築きそれを支配して社会的に成功した。その帝国は長く継続され西欧文明よりも強大でその期間が長かったといわれるが、資本主義の勃発と共に没落の一途を辿った。その原因は信仰の中心となるドグマ（教義）にある。イスラム教のドグマはコーランであるが、彼らはひたすらコーランを信じ、忠実にコーランの教えを守る保守的で平和主義の穏健な教徒の群れである。それに対して、キリスト教のバイブル（聖書）はある意味で解釈学であり、カトリックからプロテスタントに分離する宗教戦争を引き起こしながら、宗教改革後の資本主義社会に移行する事が可能であった。つまり、俗なる社会と聖なる社会が区別されて存在するこ

青年の社会的危機意識に関する若干の考察

とが可能になった。しかし、イスラム教はそのように便利な解釈が出来ない。ムハマンドの世界から一歩も出ないようにみえる。自由度が低いのである。1996年カブールで発表された宗教警察本部の布告によれば、現代社会に人間として生きている者には驚愕の連続である。以下に記す。

1：誘惑及び女性の顔などの露出の禁止、2：音楽の禁止、3：顎髭剃りの禁止、4：小鳥を飼うことの禁止、5：風あげの禁止、6：偶像崇拜の禁止、7：賭博禁止、8：麻薬使用の禁止、9：米英風のヘアスタイルの禁止、10：借金に対する利息及び小銭への両替手数料、送金手数料の禁止、11：市中の水路で若い女性の洗濯の禁止、12：結婚式での歌や踊りの禁止、13：音楽用ドラムの禁止、14：女性用洋服の縫製と女性の寸法取りの禁止、15：すべての呪術の禁止、16：不礼拝禁止とバザールでの集団礼拝の指示。

(2) テロリズムの特徴 (Mindell, 1995)

1) 権力志向、2) 絶望、3) 無謀、4) 忠誠 (自分の所属集団の根源的なルーツにまで溯る)、5) 中毒、テロリズムは「激怒への中毒 (die Rachsucht)」といわれている。6) 復讐の禁止、7) 集団に対する非難、8) 自己破壊、9) 強さに関する無関心。
：精神病理学ではテロリズムは「自己愛障害」、「パラノイア」などに分類されている。

参考文献

- 黒井文太郎 世界のテロと組織犯罪 ジャパン・ミリタリー・レビュー、2001
ブラウン.H. なぜ人を殺してはいけないのですか。幻冬舎、2001
Maruyama, K. Social anxiety and consciousness of global crisis in modern youth. The J.of Seigakuin University, Vol.5, 129-147, 1992.
Maruyama, K. Vorstudie zur struktur globalan Krisenbewusstseins und gesellschaft bei der gegenwärtigen, japanischen Jugend. Behaviormetrika, Vol.21, No.1, 19-47, 1994.
Maruyama, K. & H.Biebeler. Japanische und deutsche Studenten:Religieöse und politische Mentalitäten im Vergleich.Z-A information(Universität in der Kölen), Vol.37, 51-63, 1995.
Maruyama, K. & H.Biebeler, Comparative study of social unrests in global social unrest and crisis among Japanese and German University students. Behaviormetrika, Vol.25, No.2, -81-94, 1998.
Maruyama, K. A comparative study of the religious pluralism and political attitudes in modern youth. International Medical Journal, Vol.4, No.2, 135-141, 1997.
丸山久美子 自然的・人為的社會不安に関する青年の危機意識を探る－日独青年の社會問題に対する不安感の比較研究－, 聖学院大學論叢, 第9巻, 第1号, 101-118, 1996。
丸山久美子 青年の社会的危機意識に関する構造の比較研究－アイルランド人・日本人大学生の価値観を探る－, 聖学院大學論叢, 第13巻, 第2号, 175-186, 2001。
Mindell, A. Sitting in the fire, Lao Tse Press, 1995。(紛争の心理学－融合の炎のワーク－永沢哲 (監修), 青木聡 (訳), 講談社現代新書, 2001)。
長尾 龍一 政治的殺人－テロリズムの周辺－弘文堂, 1989。
Rashid, A. TALIBAN:Islam, Oil and New Great Game in Central Asia.I.B.Tauris & Co.Ltd. 2000。(タリバン－イスラム原理主義の戦士たち－, 坂井定雄, 伊藤力司共訳, 講談社, 2001)
佐渡 龍巳 テロリズムとは何か, 文春新書, 2000。
鈴木 良平 I R A－アイルランド共和軍－, 第四版増補, 1999。
山内 昌之 「イスラム原理主義」とは何か, 岩波書店, 1996。
山内 昌之 「政治家とリーダーシップ」, 岩波書店, 2001。